

演劇・文学と巡礼 —河合眞澄氏の講演によせて—

小嶋 博巳（ノートルダム清心女子大学文学部教授）

Plays, Literature and Pilgrimage - A Lecture by Masumi Kawai
Hiromi KOJIMA
Professor, Faculty of Letters, Notre Dame Seishin University

河合眞澄氏の講演「歌舞伎の中の巡礼」では、四国遍路と西国巡礼に題材をとった近世の上方歌舞伎が取り上げられた。拝聴するにあたっての筆者の興味の一つは、歌舞伎は巡礼者というキャラクターをどう利用してきたのかという点にあった。近世社会が巡礼というものをどう見ていたのか、それが窺えるのではないかと思ったのである。

河合氏によれば、歌舞伎では、巡礼は登場人物に移動の自由を与える手段として利用されるという面が大きかったようである。登場人物たちは巡礼にこと寄せ、身をやつして、旅（しばしば人探しの旅）に出た。また氏によれば、浄瑠璃を含めて、近世演劇に登場する巡礼には圧倒的に西国巡礼が多いという。文化の中心地であった上方の人びとにとって、畿内とその周辺の観音霊場を巡る西国巡礼はきわめて親しいものであり（しかも西国巡礼は室町後期には民衆化が進んでいたとされる）、素材として取り上げられやすい条件があったのであろう。これに対して、四国遍路はいまだ情報も乏しく、演劇に登場する場合にはむしろ、生活圏の外にある未知の空間に対する人びとの興味・好奇心に応えることが意識されていたらしい。

唐突であるが、ひるがえって近代以降について考えてみよう。近現代の文学でも、創作の素材として巡礼行動や巡礼空間が利用されることは少なからずある。まず想起されるのは田宮虎彦『足摺岬』（1949年）や素九鬼子『旅の重さ』（1972年）であり、近くは坂東眞砂子『死国』（1993年）であろうか。映画化によって巡礼シーンがつよく印象づけられることになった松本清張『砂の器』（1960-61年、映画化は1974年）も、加えてよいであろう。さらに、井伏鱒二『へんろう宿』、野坂昭如『花のお遍路』、早坂暁『花へんろ』、澤田ふじ子『遍照の海』、島村洋子『ザ・ピルグリム』等々をあげることもできる。きわめて乱暴な括り方をすれば、こうした作品では、社会からドロップアウトする回路、あるいは再生する回路、さらには幽明の境界を超えて死者と邂逅する回路などとして、巡礼が利用されているとってよい。そして、ただちに気づかれるように、これらに登場する巡礼はいずれも四国遍路なのである。西国巡礼に材をとった作品は——少なくともここにあげた諸作と同等以上の知名度をもつ作品は、ないといって差し支えなからう。坂東・秩父はじめ、他の巡礼についてはいうまでもない。

その理由を想像することは難しくない。島という閉じられた空間、無限の反復を誘う円環的な巡礼地構造、徒歩という原初的な旅の方法を可能にする環境、それらの結果としての適度な苦行性、遍歴と定住の交渉というべき門付けや接待、近代になお色濃く残っていた社会的弱者の受け皿という役割——総じていえば、四国遍路という巡礼がもつ（とみなされた）高い非日常性が、創作上、有効であるからにほかならない。そして、近代にあつてはその種の非日常性は、西国巡礼にもその他の巡礼にも、もはや期待されなかったのである。四国遍路が、近現代日本の巡礼のなかでも特異な視線を向けられていた巡礼であったことに、あらためて気づかされる。と同時に、近現代の社会が巡礼をどのようなものとして見ようとしていたのかを、このことは教えてくれるのである。

創作に登場する巡礼は、そこに向けられた社会の眼差しを反映している。この意味では、河合氏が、近世演劇に登場する巡礼には弱者というイメージがある、と発言されたのはいへん興味深いことであった。ただ、西国巡礼が大きな比重を占めているとしても、近世演劇には四国遍路も取り上げられ、また江戸歌舞伎にはほぼ限定されるということではあるが六十六部もしばしば登場した。おそらく、登場人物が西国する者と名乗るのか、辺路道者として登場するのか、あるいはまた六部の拵えで出るのかという点もまた、意味のない違いではあるまい。そこになにを読み取るかは、演劇・文学研究と巡礼研究の共通の課題の一つになりうるのではなからうか。

*

以上の、きわめて雑駁な感想のほかにもう一点、逆に少々微視的に、氏の講演内容に関連して注意を喚起しておきたいことがある。

今回、河合氏が詳細に紹介された作品の一つが、宝暦12年（1762）、大坂の角の芝居で初演された『竹篋太郎怪談記』であった。その四ツ目で、土佐の真念庵が舞台として登場する。四国を逆打ちして敵を探索する(!)女性が、当の敵の伯父が庵主となっている真念庵に宿を乞うのである。真念庵の坊主と巡礼者（「辺路道者」とある）とのやりとりの中に、女人一人旅の宿泊の忌避や、真念庵の役割、国境での切手の取り扱い等々が——事実かどうかは別として——垣間見え、興味深いのであるが、とりわけ注意されるのは、高野山の役人の登場である。

作中では、真念庵には「四国八十八ヶ所を改め」のために高野山から派遣された役人が逗留しており、足摺（38番金剛福寺）や寺山院（39番延光寺）等を巡察している。この改めについては、「五年に一度 三年に一度は 高野山より 四国八十八ヶ所は言ふに及ばず 其外真言の寺々 法流を吟味するが先格」とあり、今回も「阿波 讃岐 伊予を改め 当国も今二三日で仕舞」であるという。つまり、高野山が四国の札所寺院を統制下におき、監督しているという設定になっているのである。この点は、すでに河合氏の論文（『近世演劇にみる四国遍路』四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法藏館、2007）でも指摘されていたことであるが、じつは少々検討すべき問題をはらんでいる。

一般に、四国の札所寺院の組織化は、近世段階ではほとんど進んでいなかったと考えられている。霊場会の設立はもとより近代のことである。また、高野山との関係でいえば、八十八カ所の札所寺院は真言宗に属すとは限らず、本末関係を超えてそれらに高野山の統制の手が及ぶとは考えにくい。巡拝様式の面でも、現在のような八十八カ所結願後の高野山参拝が慣例化するのには、高度成長期以降である。こうしたことを前提に考えれば、『竹篋太郎怪談記』のこの部分は、八十八カ所—弘法大師—高野山という作者の思い込みの産物、ないしは創作上の必要からくる虚構とみるのが、とりあえずは妥当ということになるだろう。作中の高野山の役人は、やがて庵主とその甥の悪計が露見するにあたって重要な役割を果たすことになるのである。

この芝居ではほかにも、真念庵が庵主のほかにも複数の弟子坊主がいる大きな寺のように描かれているし、またフロアで指摘されていたが、その立地の設定（松尾坂峠や笹山・月山との距離・位置関係）にも無理があるようである。これら芝居の上の脚色は、本来、とりたてて問題にするようなことではなかろう。ただ、高野山の八十八カ所改めという設定については、なお少々留意しておきたい事情がある。それは、この狂言が宝暦12年の初演であることと関わる。

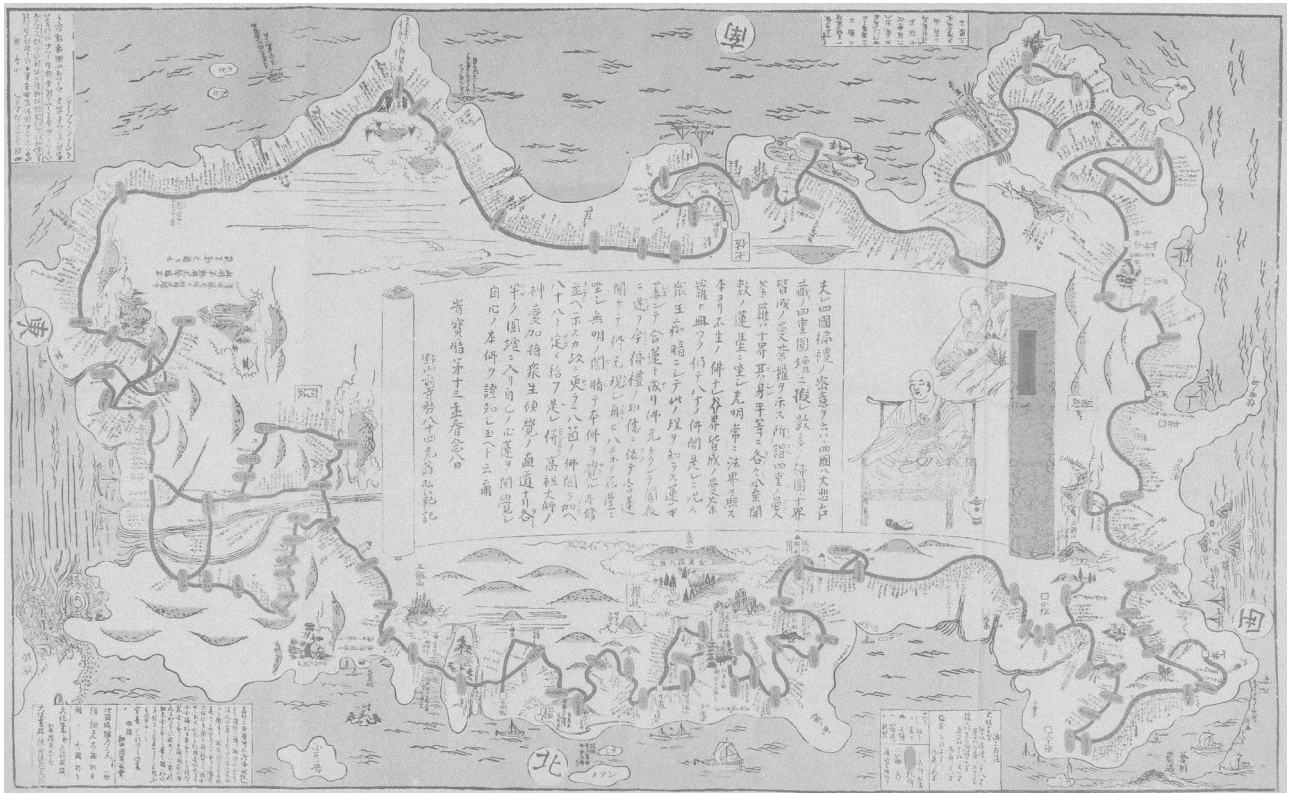
周知のように、現在につながる四国遍路の体系化・民衆化は17世紀後半の真念の活動に負うところが大きいと考えられている。ただ、『四国辺路道指南』の刊行（貞享4年〔1687〕）は大きな画期となったにしても、その後ただちに八十八カ所の権威が確立したとはいえない。真念の依頼を受けて高野山の学僧寂本が『四国徧礼霊場記』（元禄2年〔1689〕刊）を著すことになるが、寂本は、八十八カ所の次第はいつ誰が決めたものかもわからないとして、番次を無視して善通寺から書き起こし、さらに八十八の札所以外にも数カ所の寺や名所をあげている（札所との区別はしているが）。八十八カ所の存在を認識しながら、それを弘法大師由来の神聖な権威として尊重する態度は乏しいのである。

しかし、18世紀の半ばになるとやや異なる状況がみえる。このことを指摘したのは松尾剛次氏で、氏は、四国遍路絵図のうちでもっとも古い宝暦13年（1763）の刊記をもつ「四国徧礼絵図」に、高野山前寺務・弘範による四国遍路の「密教的意味付けの文言」（「四国徧礼之序」）があることに注目する。これは、四国を「大悲台蔵ノ四重円壇」すなわち胎蔵界曼荼羅に擬して八十八カ所を説明し、それを高祖大師（弘法大師）の教えとするものである。以後、多くの絵図がこれを継承してゆく。松尾氏は、この弘範の意味付けは高野山の最高責任者が四国八十八カ所に与えた「お墨付き」にほかならず、ここに至って四国八十八カ所は「確立」したとみるのである（松尾剛次「四国八十八札所の成立——四国遍路絵図を手がかりとして——」『宗教研究』76-2、2002）。

巡礼という多分に習俗的・非制度的な性格をもつ宗教が、しかし一方で高野山のような制度宗教の権力との関係においてその姿を整えてゆく歴史的過程があるというのが、おそらく松尾氏の主張の眼目であろう。

それはいま措くとしても、17世紀末の寂本の段階と18世紀半ばの弘範の段階で、四国八十八カ所に対する高野山の態度に顕著な変化がみられることは確かである。そして、その変化が確認されるのが、『竹篋太郎怪談記』初演とほぼ同時期刊行の「四国徧礼絵図」なのである。

『竹篋太郎怪談記』はそもそも創作である。しかし、「四国徧礼絵図」との年代的符合を考えると、18世紀半ば、高野山に四国八十八カ所に対して一定程度積極的な対応をする動きがあって、それが反映している可能性も想定してみたくなる。芝居中の一登場人物の設定にすぎないが、あるいは、近世の四国遍路の歴史に関わる重要な情報がここに潜んでいるのかもしれない。



四国徧礼絵図（宝暦13年刊 文化4年版／当センター蔵）



河合眞澄氏 講演



公開講演会シンポジウム（2016年10月29日）